

# 漢代檄の伝達方法と機能

— 文書と口頭伝達 —

藤 田 勝 久

## はじめに

漢代の中央と地方を結ぶ文書伝達は、大きく二つの方法がある。1は、公文書を開封することなく、各施設に通伝する方法である。いわば今日の郵便の機能である。2は、中央から郡や県の地方官府に伝達された公文書を、さらに下部の部署や施設に伝達する方法である。これは地方官府から中央に文書を伝達する場合も同じであり、このように宛名を記した文書（もんじょ）を通じて地方統治を貫徹する方法を、文書行政としている。<sup>(1)</sup>しかし二つの文書伝達をみると、それは宛名を記した文書の木簡だけではない。

たとえば、1の文書通伝では、受け渡しをした場所で郵書の記録を作成している。さらに文書通伝を管轄する部署では、冊書の郵書記録を作成し、それを送付してはじめて宛名を記した文書となる。<sup>(2)</sup>その報告に対して、上級官府から命令や指示が下される場合は、たしかに文書行政の範囲にふくまれる。したがって文書通伝の実務では、文書行政による命令伝達の要素もあるが、多くは実務の記録として作成されている。ここに漢代地方の簡牘に、文書と記録の機能がみえている。

2の場合には、地方官府で受け取った文書の記録を作成し、そのあと開封して文書の処理、返信、報告をすることになる。ここでは伝達された文書の本体だけではなく、それを転送して処理するための控えや、文書の副本、報告のための実務の記録が想定される。<sup>③</sup>これは下部から上部に送る上申文書も同じである。ここにも文書と記録の機能がみえている。

近年では、こうした漢代の文書行政について、下行文書と上行文書などの伝達にとどまらない簡牘研究がふえている。たとえば大庭脩、角谷常子氏は、簡牘の形態と書法に注目して、文書の作成から発信に至る手続きや、受信とその処理の過程を明らかにしようとした。<sup>④</sup>また李均明、邢義田氏は、正式文書（正本、原本）か抄本（写し）、副本・底本（控え、本文のコピー）、草稿（下書き）であるかの違いを考察している。<sup>⑤</sup>ここで大切なのは、これらの正本と抄本、副本などを通じて、地方官府における情報処理の方法と共通する規格（format、フォーマット）を理解することである。そして文書の情報処理から展開して、地方官府の実務と運営を明らかにし、地域性をふまえた吏民における情報伝達のあり方を考える必要がある。

この点からすれば、2の文書伝達では、さらにいくつかの形態がある。①は、これまで考察されてきた冊書による文書である。②は、觚<sup>⑥</sup>（多面体、多面柱）の形状で表面に文章がみえるといわれる檄の伝達である。③は、伝達された文書を扁書として広く知らせる掲示の形態である。<sup>⑥</sup>本稿では、このうち②単独簡で使用される檄の伝達方法を例として、漢簡にみえる地方官府の文書伝達と情報処理を考えてみたい。

## 一 史書にみえる檄の伝達

檄には、文献と出土資料による諸説がある。大庭脩「檄書の復原」(『漢簡研究』一九九二年)では、『說文解字』に「二尺の書」とあり、史書の檄は文書や、人を徴召する「めしぶみ」、民に諭告する意味をもつという。<sup>7)</sup>そして軍事・軍書を伝える文というのは、長年のうちにできたもので、本来の意味ではないと推測している。また漢簡の檄書には、教諭や軍書の例があるが、それは下達文書に限らず、上申文書、同職間の文書でもあると指摘する。その形状は、多面体で長い觚を用いるものが多く、「如檄書」「移檄」「檄到」「檄言」などのキーワードをふくむとする。そして封泥匣がある場合は、封泥は命令を保証する印信とする。

李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』(文物出版社、二〇〇九年)は、檄が緊急にかかわり、強い説得や訓戒、警告の機能をもつとし、漢簡の名称に従って府檄、警檄、行罰檄に分類している。<sup>8)</sup>また沈剛『居延漢簡語詞滙釈』(科学出版社、二〇〇八年)は、檄の諸説を一覧している。<sup>9)</sup>マイクル・ローウェ氏は、『漢代行政記録』で「快速の連絡を満たす場合か、あるいは多くの受信者に情報を知らせる必要性」と解釈している。<sup>10)</sup>

これに対して、鷹取祐司「漢簡所見文書考」(二〇〇三年)では、檄は「書」「記」のような文書名称ではないという。ここで集成した檄は、すべて発信者が長官で、書き止めが「如(某)律令」で「書」と同一の書式である。また「有教」をふくむ記載は「記」の書式である。そこで檄は、書写材料の一つである觚を指し、檄書は檄に書かれた書の意味とする。<sup>11)</sup>

角谷常子「簡牘の形状における意味」(二〇〇三年)は、觚の形状をもち、宛名と封泥匣がある簡牘について、五〇センチ以上の長い簡は通常の文書とする。また二〇センチ程度の短い簡は証明書や符の機能をもち、別に「識字

教本」の要素があるとする。そして檄は、円柱状（多面体）の書写材料であり、下達と上申の文書がある。内容は、「詣官」「驗問（取り調べ）」など「記」と共通するものがあるが、本来の意義は、有事における情報伝達とみなしている。これは通常の範囲に収まらず、イレギュラーな性格をもつため、その形状も文書と異なるという<sup>⑬</sup>。

富谷至「檄書攷」（二〇一〇年）は、檄が書写材料と文書の両方を意味する名称として、その重要な特徴を露布簡とする<sup>⑭</sup>。檄は觚の形状で封泥匣をもつ簡が多いが、露布とは証摺印の封泥を開かなくても文面がみえる文書である。そこで檄は、揭示して衆人が目にすることを想定した木簡とみなす。その機能は、1 行政文書の確実なやりとりを各官署に周知させ、権力者の威光、命令の徹底を公示して、行政の効果を実感させること、2 ある文書の送付に隠匿部分や送付形式の変化をもたせ、各官署の官吏を操縦し、掌握を謀ること、3 公的な檄では、民衆がそれを目にするこ

とで威嚇、督励の効果を生みだすとして、「視覚簡牘」という機能を強調している。

このように、これまで檄の形状は、長い簡で觚の形態が多いとみなされている。觚は多面体の簡で、密封せずに表面が露出した文書（露布）となる。しかし檄の名称については、書写材料とするもの、書写材料と文書の両方とする説がある。檄の内容は、有事や軍事に関するものが多く、また命令や教諭、報告、要請など多様であるが、徴召の用途もある。また上行文書のほか、下行文書、同行文書の場合があるといわれる。その本来の意義は、有事の情報伝達とするほか、上からの緊急な命令、訓戒、教諭を重視する説がある。富谷至氏は、とくに檄を「視覚簡牘と文書行政の最も完成されたもの」として、檄を揭示することで権力者の威光、命令の徹底を公示し、官吏の操縦・掌握と、民衆への威嚇、督励の効果をもつとみなしている。このように檄は、その形状と内容について諸説があるが、問題となるのは伝達の方法と、冊書とは異なる機能である。

それでは史書の檄は、どのような性格をもつのだろうか。まず文書の内容をもつ檄を検討してみよう。『史記』に

は、戦争の際に「伝檄」し、「羽檄」で徴兵をする例がある。

1 范陽令乃使蒯通見武信君曰……。蒯通曰……令范陽令乘朱輪華轂、使驅馳燕・趙郊。燕・趙郊見之、皆曰此范陽令、先下者也、即喜矣、燕・趙城可毋戰而降也。此臣之所謂傳檄而千里定者也。〔《史記》卷八九張耳陳餘列伝〕

2 上曰、何謂上計。令尹對曰、東取呉、西取楚、并齊取魯、傳檄燕・趙、固守其所、山東非漢之有也。

〔《史記》卷九一黥布列伝〕

3 上曰、非若所知。陳豨反、邯鄲以北皆豨有、吾以羽檄徵天下兵、未有至者、今唯獨邯鄲中兵耳。吾胡愛四千戶封四人、不以慰趙子弟。

〔《史記》卷九三韓信盧綰列伝〕

4 王欲發國中兵、恐其相、二千石不聽。王乃與伍被謀、先殺相、二千石。偽失火宮中、相、二千石救火、至即殺之。計未決、又欲令人衣求盜衣、持羽檄、從東方來、呼曰、南越兵入界、欲因以發兵。

〔《史記》卷一一八淮南衡山列伝〕

1 楚漢戦争の時期には、蒯通の策に「傳檄而千里定」とある。この説明では、投降した范陽令が車で燕・趙の郊外に馳せて、かれを人びとに見せることによって安心させ、戦わずして投降させるというものである。このとき「檄を伝え」とあるのは、范陽令に檄を持たせていることになる。

2 漢代初期の黥布の叛乱では、何が黥布の上策かと高祖が問うたとき、令尹は「傳檄燕・趙、固守其所」と答えている。これは1と同じような状況で、他の諸侯王国への伝達である。3は、陳豨の叛乱に対して、高祖が「羽檄」で天下に徴兵すると述べている。これは『漢書』卷一高帝紀下、漢十年九月条の同文に顔師古の注がある。

師古曰、檄者、以木簡為書、長尺二寸、用徵召也。其有急事、則加以鳥羽插之、示速疾也。魏武奏事云、今邊有警、輒露檄插羽。

ここでは檄が長さ一尺二寸の木簡で、徵召に使用するという。羽檄は、鳥の羽を挿して急用であることを示し、『魏武奏事』に言う「露出した檄」に羽を挿すものと解釈している。また檄の伝達には、『史記』卷九二淮陰侯列伝に「今大王舉而東、三秦可傳檄而定也」とあり、『漢書』卷三四韓信伝の同文に顔師古の注がある。

師古曰、檄謂檄書也。傳檄可定、言不足用兵也。

以上の例では、戦争の際に臨時の檄や羽檄を伝えている場合が多い。こうした情勢による「傳檄而定」の例は、前漢後半期や後漢時代も同様である。<sup>①</sup>この意味で、檄は有事の際や軍事に使われることが多いといえよう。しかしこれらは行政機構による伝達とは違っている。1、2や、『史記』淮陰侯列伝の例では、敵方や他の諸侯王国に檄を発することを想定している。ただし秦二世皇帝の末に各地で叛乱が起こったとき、南海郡尉の職務を受けた龍川令の趙佗が、防衛のために横浦・陽山・湟谿関に出した檄は、行政機構による伝達と想定される。

5 南越王尉佗者、真定人也、姓趙氏。秦時已并天下、略定楊越、置桂林・南海・象郡、以謫徙民、與越雜處十三歲。佗、秦時用為南海龍川令。至二世時、南海尉任囂病且死、召龍川令趙佗語曰……。即被佗書、行南海尉事。囂死、佗即移檄告横浦、陽山、湟谿關曰、盜兵且至、急絕道聚兵自守。因稍以法誅秦所置長吏、以其黨為假守。

（『史記』卷一一三南越列伝）

史書にみえる檄の伝達は、軍事の場合に限らない。たとえば武帝期に、夜郎に道を通じさせようとして巴蜀の吏卒千人を徵発し、輸送の人びと万余人を徵発したとき、巴蜀の民に動揺が拡がり、それが皇帝の意志ではないことを知らせた檄がある。

6 相如為郎數歲、會唐蒙使略通夜郎西徼中、發巴蜀吏卒千人、郡又多為發轉漕萬餘人、用興法誅其渠帥、巴蜀民大驚恐。上聞之、乃使相如責唐蒙、因喻告巴蜀民以非上意。檄曰、告巴蜀太守……。今聞其乃發軍興制、驚懼子

弟、憂患長老、郡又擅為轉粟運輸、皆非陛下之意也。當行者或亡逃自賊殺、亦非人臣之節也。……陛下患使者有司之若彼、悼不肖愚民之如此、故遣信使曉諭百姓以發卒之事、因數之以不忠死亡之罪、讓三老孝弟以不教誨之過。方今田時、重煩百姓、已親見近縣、恐遠所谿谷山澤之民不徧聞、檄到、亟下縣道、使咸知陛下之意、唯毋忽也。

〔史記〕卷一一七司馬相如列傳

ここでは「檄到、亟下縣道、使咸知陛下之意、唯毋忽也」とあるように、巴・蜀の太守に命じて下部の県・道に伝達させ、今回の事件が武帝の意志ではないことを人びとに周知させよという文言を載せている。<sup>(5)</sup>これは緊急性はあるが、軍事的な内容ではない。また武帝期には、王溫舒等の方法に倣って悪人を利用したため、各地の郡県で盜賊が横行し、盜賊が檄を伝えた例がある。これは地方官府ではなく、盜賊が檄を県に伝えて食料を提供させている。

7 自溫舒等以惡為治、而郡守、都尉、諸侯二千石欲為治者、其治大抵盡放溫舒、而吏民益輕犯法、盜賊滋起。南陽有梅免、白政、楚有殷中、杜少、齊有徐勃、燕趙之間有堅盧、范生之屬。大羣至數千人、擅自號、攻城邑、取庫兵、釋死罪、縛辱郡太守、都尉、殺二千石、為檄告縣趣具食。

〔史記〕卷一二二酷吏列傳

このように秦代と前漢武帝期までの檄をみると、その伝達は一定の緊急性をもっている。しかし内容は、軍事に限定されない。そこには、司馬相如の檄のように皇帝の意志を知らせる場合や、酷吏列伝にみえる盜賊が県に檄を出す場合がある。また伝達する官府に注目すると、戦争時に敵方を投降させるために出す檄は、地方行政機構の長吏に充てた文書ではない。したがって檄は、必ずしも有事や軍事を目的とするものではなく、また行政機構を通じて命令や訓戒を出す場合に限られない。また「檄を伝える」とは、書写材料の形状を意味するものではない。なぜなら、もし觚の形状をもつ檄を伝えるのであれば、それは形状を示す簡牘として表現するはずだからである。使者や官吏が「檄を伝える」とあるのは、一見して冊書の形態とは異なる檄という一種の文書を伝達したことになる。



そこで檄に共通する要素をみると、その伝達は長吏だけではなく、広く吏民に周知させる場合が多い。たとえば、1は車に乗って檄を伝え、その人物を敵方の人びとに見せて安心させる効果をもっている。4羽檄を伝える例では、求盗の衣を着せ、羽檄を東方から持って来たようにみせかけ、「南越の兵が境界に入った」と叫ばせている。それによつて発兵させようと企てるものであるが、ここでは檄の伝達に際して口頭でも広く知らせている。6の場合も、檄は巴蜀太守に出されているが、その文面には県・道に伝えて巴蜀の吏民に周知させることを記している。したがって檄の用途は、地方官府の長吏・官吏に特定した伝達ではなく、広く地方の吏民に伝えて周知させるケースが多いといえよう。このような情報の公開性と、公布の要素が、檄の一つの特徴である。

この特徴は、前漢後半期から後漢時代でも同じような傾向をもっており、さらに追加する点がある。

8 宣獨移書顯責之曰、告櫟陽令。吏民言令治行煩苛、適罰作使千人以上、賊取錢財數十萬、給為非法、賣買聽任富吏、賈數不可知。證驗以明白、欲遣吏考案、恐負舉者、恥辱儒士、故使掾平鐫令。孔子曰、陳力就列、不能者止。令詳思之、方調守。游得檄、亦解印綬去。 (『漢書』卷八三薛宣伝)

9 姑幕縣有羣輩八人報仇廷中、皆不得。長吏自繫書言府、賊曹掾史自白請至姑幕。事留不出。功曹諸掾即皆自白、復不出。於是府丞詣閣、博乃見丞掾曰、以為縣自有長吏、府未嘗與也、丞掾謂府當與之邪。閣下書佐入、博口占檄文曰、府告姑幕令丞、言賊發不得、有書。檄到、令丞就職、游徹王卿力有餘、如律令。王卿得救惶怖、親屬失色、晝夜馳驚、十餘日間捕得五人。博復移書曰、王卿憂公甚效。檄到、齎伐閱詣府。部掾以下亦可用、漸盡其餘矣。其操持下、皆此類也。 (『漢書』卷八三朱博伝、琅邪郡の太守)

10 躬既親近、數進見言事、論議亡所避。衆畏其口、見之仄目。躬上疏歷詆公卿大臣、曰、……軍書交馳而輻湊、羽檄重迹而押至、夫愷臣之徒憤耗不知所為。 (『漢書』卷四五息夫伝)



11 義自號大司馬柱天大將軍、以東平王傳蘇隆為丞相、中尉皋丹為御史大夫、移檄郡國、言莽鳩殺孝平皇帝、矯攝尊號、今天子已立、共行天罰。郡國皆震、比至山陽、衆十餘萬。〔漢書〕卷八四翟方進傳、子の義

8 では、成帝期に薛宣が櫟陽令の謝游に書を下して責めたところ、謝游が辞任したという記事である。ここでは同じ書を、檄と言い換えている。9 は、朱博が自分で口述して檄文を書かせ、「檄到、令丞就職、游徼王卿力有餘、如律令。」と命じている。二度目に出した書は、文中で「檄到」と述べている。ここでも書と檄は、同じ文書を表している。この二度目の文書は、「伐閼」を持参して府に来させるもので、徵召にあたる檄であろう。顔師古は、「伐、功勞也。閼、所經歷也」と解釈している。

10 は、哀帝期の息夫躬が、匈奴との戦争について上疏した文に、軍書や檄が伝達される様子を述べている。顔師古は「押至、言相因而至也。羽檄、檄之插羽者也」と解釈しており、これによれば軍書と檄は区別して伝達されている。11 は、郡国に檄を伝達して、王莽が平帝を殺したと民衆に知らせている。

後漢時代には、『後漢書』光武帝紀第一上に「復北擊中山、拔盧奴。所過發奔命兵、移檄邊部、共擊邯鄲、郡縣還復響應」とあるほか、多くの例がある。

12 朱鮪聞光武北而河内孤、使討難將軍蘇茂、副將賈彊將兵三萬餘人、度鞏河攻溫。檄書至、恂即勒軍馳出、並移告屬縣、發兵會於溫下。……時光武傳聞朱鮪破河内、有頃恂檄至、大喜曰、吾知寇子翼可任也。諸將軍賀、因上尊號、於是即位。〔後漢書〕鄧寇列伝第六、寇恂

13 初、彭與交趾牧鄧讓厚善、與讓書陳國家威德、又遣偏將軍屈充移檄江南、班行詔命。於是讓與江夏太守侯登、武陵太守王堂、長沙相韓福、桂陽太守張隆、零陵太守田翕、蒼梧太守杜穆、交趾太守錫光等、相率遣使貢獻、悉封為列侯。或遣子將兵助彭征伐。〔後漢書〕馮岑賈列伝第七、岑彭

14 世祖從之。拜光為左大將軍、封武成侯、留南陽宗廣領信都太守事、使光將兵從。光乃多作檄文曰、大司馬劉公將城頭子路、力子都兵百萬衆從東方來、擊諸反虜。遣騎馳至鉅鹿界中。吏民得檄、傳相告語。

〔後漢書〕任李萬邳劉耿列伝第一一、任光

15 荊州刺史表上之、再遷、中元元年、拜司隸校尉。詔昱詣尚書、使封胡降檄。光武遣小黃門問昱有所怪不。對曰、臣聞故事通官文書不著姓、又當司徒露布、怪使司隸下書而著姓也。

〔後漢書〕申屠剛鮑永邳惲列伝第一九、鮑昱

12 は、光武帝が即位する前に、河内郡が孤立したとき、檄書を受けた太守の寇恂が所屬の県に檄を伝達して告げ、兵を温県に集合させて守っている。これは軍事に関する伝達であるが、広く各県に知らせている。その光武帝への報告も、檄で伝達している。13 は、光武帝の時代に、岑彭が蜀漢を攻撃するとき、交趾牧の鄧讓に書を送って国家の威徳を述べ、また偏將軍を派遣して檄を伝達し、江南の地に広く詔命を行き渡らせたという。ここでは長官に送る文書とは別に、使者によって檄を直接に伝達し、その檄は江夏太守や、武陵太守、長沙相、桂陽太守、零陵太守、蒼梧太守、交趾太守などに知らせる効果をもっている。14 は、更始二年に左大將軍の任光が檄文を作り、騎を遣わして鉅鹿の界中に馳せさせている。ここでは檄の内容を吏民に知らせ、互いに口頭で伝えさせている。これは檄の内容が、口頭で伝達できる状態であったことが注意される。

15 は、光武帝の中元元年に、胡に降伏をうながす檄を作成したとき、司隸校尉の鮑昱が、通官の文書は姓を記さず、司徒が印をして、露布とすることを指摘したものである。注には「檄、軍書也、若今之露布也」とあり、露布とは封印をせずに内容が見える形態を指し、その場合は証明の印とみなされている。<sup>(16)</sup>

また檄が書写材料か文書かという点については、後漢時代の著述を記した史料がある。ここでは著述のなかに、書

などと並んで檄をあげており、文章表現の一種であることを示している。

16 所著賦、銘、碑、讚、禱文、弔、章表、教令、書、檄、牋記、凡二十七篇。〔『後漢書』皇甫規列伝第五〕

17 所著詩、頌、碑文、論議、六言、策文、表、檄、教令、書記凡二十五篇。文帝以習有欒布之節、加中散大夫。

〔『後漢書』鄭孔荀列伝第六〇、孔融〕

18 靈帝時、從車騎將軍朱儁征黃巾、為別部司馬。著賦、頌、碑文、薦、檄、牋、書、謁文、嘲、凡十九篇。

〔『後漢書』文苑列伝第七〇下、張超〕

以上は、文書の内容をもつ檄の例である。このほか檄には、人びとを徴召する例が指摘されている。<sup>(17)</sup>このような檄の伝達は、つぎのように整理することができよう。

一、檄の伝達は、使者などによって広く吏民に周知させる場合と、行政機構のなかで伝達する場合がある。また檄には、文書によってメッセージを伝達するものと、人びとを徴召する場合がある。徴召をのぞく檄は、緊迫した情勢が伝達の背景にあり、一定の緊急性と重要性がうかがえる。しかし檄の伝達は、必ずしも軍事に限定されない。たとえば地方政権が、敵方に檄を伝達して投降をうながすことや、他の諸侯王国への伝達、徴兵をする場合、盗賊が糧食を要求することには、軍事的な背景がある。しかし司馬相如が使者となった例では、皇帝の意志を巴蜀太守に下す檄は、軍事的な内容ではない。

二、檄の伝達は、行政機構のなかで伝達する場合でも、上級官府と下級官府の長吏や官吏に限られていない。檄の形態は、書を檄と言い換えている場合もあるが、多くは文書と区別して伝達されている。その特徴の一つは、冊書の封書と区別して見分けられ、それは長大な簡に書かれ、目にふれる状態であることが予想される。したがって檄の本質は、政府が官吏を掌握し、威圧の効果をもつ要素に特定されないことが指摘できる。

三、檄の伝達は、その背景となる情勢が違っているが、そこには広く情報を周知させるといふ共通の要素が目される。ある場合には、檄の公布や閲覧にともなつて口頭で伝えている。このように情報の公開性をもち、公布をともなう「ふれぶみ」の要素は、M・ローウェ氏が指摘された「快速の連絡を満たす場合か、あるいは多くの受信者に情報を知らせる必要性」という解釈がもつとも近いものである。

ただしこれは史書にみえる特徴であり、檄の形状や、具体的な内容と伝達方法を知ることとはできない。つぎに問題となるのは、一に文書通伝の郵書記録にみえる檄の伝達と、二に觚の形状をもつ漢簡の用例と伝達方法である。

## 二 郵書記録にみえる檄の伝達

史書では、使者などによる檄の伝達と、行政機構による伝達、徴召の檄がみえていた。このうち行政機構による檄の伝達は、郵書記録の文書通伝にみえている。居延漢簡には檄をふくむ郵書記録は少ないが、懸泉漢簡によつてその用例が増えている。<sup>(18)</sup> 懸泉漢簡では、まず皇帝璽書や上書、軍書は、他の文書通伝と区別されている。年代を付記すれば、つぎのような木簡がある。

1 皇帝璽書一封、賜敦煌大守。元平元年（前七四）十一月癸丑、夜幾少半時、縣泉譯騎得受萬年譯騎廣宗。到夜少半時、付平望譯騎 ☒ VT1612④:11A

2 入上書一封車師已校伊循司臣強 九月辛亥日下鋪時臨泉譯漢受平望馬登 A

日下鋪時 （左齒半字） B

VT1310③:67AB

3 入東軍書一封玉門都尉上 建平三年（前四）四月己未夜食時遮要廐吏並受甘井驛蘇利 A

夜食時 (右齒半字)

4 入東軍一封使者解君上 建平三年閏月己癸雞中鳴時遮要驛吏並受甘井驛吏音

中鳴時 (右齒半字)

5 入東軍書一封、敦煌中部都尉臣鄧上、詣行在所、綠緯完。居攝二年(後七)十月癸亥夕時、縣泉郵人歆受平望郵

人鄧同。即時遣張歆行。

6 入東軍書一封 阜繪緯完平望候上

王路四門 始建國二年(後一〇)九月戊子日蚤食時萬年亭驛騎張同受臨泉亭長陽A

戊子日蚤食時 (左齒半字)

これによれば皇帝璽書と上書は、それだけで伝達されており、駅騎によるものが多い<sup>(19)</sup>。軍書も、それだけで伝達されており、郵人、亭駅騎、亭長、廩吏、駅吏によるものがある。また以上の例では、側面に刻齒の半字を記す形態が多い。したがって皇帝璽書や上書、軍書は、その伝達が特に重要であり、確実に早さが要求されていると推測できる<sup>(20)</sup>。

これに対して檄の伝達では、詔書一封と一緒に送付されている場合がある。ここでは魚離御が持つて来て、すぐに遮要置に渡しており、先の駅騎による伝達とは異なっている。

7 西詔一封、檄二。詔書一封、車騎將軍印、詣都護。合檄一、酒泉丞印、詣大守府。一檄、龍勒守尉業慶印、詣賊曹敞。二月戊子、日入時、魚離御便以來、即時付遮要。

IT0115②:58

他の檄の伝達も、上書や軍書とは区別されており、檄、板檄、合檄、楊檄、合板檄、尺檄という名称がある<sup>(21)</sup>。

8 西檄五。其一檄長史印、二檄淵泉丞印、一冥安令、一檄魚離置丞。五鳳四年(前五四)十月癸卯鵠鳴時、御賢受

魚離御解事。

II T0114⑤:12

9 板檄一封、酒泉大守章、詣敦煌大守府。甘露五年（前四九）正月戊申日出時、縣泉御顧順受魚離御虞臨。

II T0214③:185

10 西檄一封、楊安意印。黃龍元年（前四九）十二月己卯、昏時、御石惠受魚離

V T1311④:19

11 西檄三。其一馬定印、詣府。一酒泉大守章、詣府。一廣至丞印、詣府。建昭二年（前三七）閏月辛卯晨時、臨泉亭長王安受魚離置、即付遮要御王忠。

I T0116②:77

12 入西書板檄二、其一母印、詣府。一、曹掾印、詣府。元延四年（前九）十月壬子、日下夕時、佐王萬受。

II T0111①:49

13 出東板檄四、皆大守章。一詣督郵、一詣廣至、一詣冥安、一詣淵泉。建平五年（前二）□□辛未、日下夕時、縣

泉御廩放付魚離卒熹

II T0114④:21

14 出西合檄・板檄二、詣府陽關。元始元年（後一）八月庚午、夜人定時、縣泉御許章付遮要置齋夫慶。

II T0111①:98

15 入東板檄一敦煌長史詣廣至 十二月戊午夜且半時受遮要御王同即時遣奴便行付魚離

II T0111①:184

16 入西合檄一、板檄三。合檄一、索普私印、詣長史君門下。板檄一、宋掾印破、詣府。板檄一、酒泉長史、詣府。

板檄一、央曹馬掾印、詣府。元始四年（後四）十一月丁卯、夜食時、縣泉佐尊受魚離。 II T0114②:167

17 入西板檄二、冥安丞印、一詣樂掾治所、一詣府。元始四年（後四）四月戊午、縣泉置佐憲受魚離置佐寶卿、即時

遣即行。 II T0214①:125

18 入合板檄一、金城大守章、詣使者涼州刺史治所。武威以西、吏馬行三月。辛酉日桑榆時、御董明受魚離廩佐寶未

央。

IT 10115④:210

19 出東合檄一、鮑掾印、詣東道平水史杜卿、元始五年（後五）四月庚戌晨時、縣泉置佐忠受遮要鐵柱□☐□

IT 10214①:13

20 出西合檄三。其二、都護郎將印章、詣使者優君・魏君。一詣犧和公孫掾。其一廣至丞印、詣大將軍司馬儲夫子。

始建國三年（後一一）十月癸酉日未出、縣御徐駿付遮要佐董永。

III T0907③:3

これらは懸泉置から東西に伝達されているが、その手段は御（御者）による伝達が多い。たとえば受け渡しは、御のほか縣泉御、縣御、縣泉御廄、縣泉置佐、縣泉佐、臨泉亭長、奴があり、魚離御、魚離置佐、魚離廄佐、魚離置、魚離卒、遮要御、遮要置畜夫、遮要佐がある。発信と受信をする官府の等級でいえば、上級から下級の機関と、同等の機関、下級から上級の機関があり、下級から上級への送付がやや多い。この伝達をみれば、檄は上級官府から下級組織に出される命令や説諭だけではないことを示している。

〔上級から下級の機関〕敦煌長史―広至県、大守―督郵・広至・冥安・淵泉泉

〔同等の機関〕酒泉大守―府、酒泉長史―府、酒泉大守―敦煌大守府

〔下級から上級の機関〕馬定―府、広至丞―府、曹掾―府、索普―長史君門下、宋掾―府、央曹馬掾―府、長

史・淵泉丞・冥安令・魚離置丞―（上級）、金城大守―使者涼州刺史治所、冥安丞―樂掾治所・府、広至丞―

大將軍司馬儲夫子

〔その他〕鮑掾―東道平水史杜卿、都護郎將―使者優君・魏君、犧和公孫掾

このように漢簡の檄は、漢王朝の行政機構をふまえており、おおむね御による伝達が多い。しかし御による伝達は必ずしも檄に限らない。たとえば次の記録は、懸泉御が魚離御から書三封を受け取っている。



21 封書二（三）、其一封冥安長印、詣敦煌。一封大司農丞印、詣敦煌。一封弘農大守章、詣敦煌大守府。甘露五年（前四九）正月甲午夜半時、縣泉御受魚離御虞臨。

II T0114③:519

また檄は、他の文書と一緒に伝達されている。これは檄の伝達が、単独で扱われているのではなく、書などの文書と同じ扱いを受けていることを示している。

22 西書三封、檄三、皆詣大守府。其二封、檄一、淵泉長印。板檄一、冥安令印。一檄、效穀左尉印。一封、張奉徳私印。三月丁亥、定昏時、西門亭長望來付樂望亭長充世。

I T0108②:5

23 出合檄一、楊記一、皆詣原掾治所。建平三年（前四）五月辛酉、日下夕時、縣泉御張宮付魚離置佐郭鳳。

II T0113②:34

24 出東檄書一封、書四封、詣王路四門。始建國二年（後一〇）十月癸亥、日舖食時、縣泉置御建若付魚離置御。

I T0114①:114

25 入東入檄二、書一封。二封敦煌長史印、詣淳於掾。書一封、西域騎都尉印、詣公車。十月辛巳、日舖時、廣至尉董卿以來、即時遣御某行。

II T0111①:212

26 入西蒲書一封、板檄一。其書一、封破、旁封、鱗腹詣敦煌府。板檄一、孫章私印、謂望卒尉承□□。十月庚戌、日中時、魚離奴萬以來、即時御趙忘行。

II T0112②:148

27 入西書一封。敦煌右尉印、詣督盜賊陳卿。合檄一、敦煌右尉印、詣督盜賊孫卿。元始四年（後四）十月乙巳、縣泉佐賞受魚離馬醫普。日食時。

II T0114②:203

28 出西書三封、合檄二封、行書一、淵泉長印、廿七日起書。一檄左丞長印。書一封、農史印。廿八日起、詣府。檄、冥安長印、廿八日起、詣龍勒。建武廿八年（後五二）八月廿九日、夜鷄後鳴時、石靡御宋見付縣泉御錢建。

29 東書一封、合檄二、板檄三、皆大守章。合檄一、詣廣至丞。書一封、詣涼州刺史。檄一、寫傳到淵泉。合檄一、詣淵泉守長。板檄一、□傳詣右扶風府。板檄一、詣酒泉大守府。正月己酉、日未中付魚離御蘇譚。

30 出東書八封、板檄四、楊檄三。四封、大守章。一封詣左馮翊、一封右扶風、一封河東大守府、一封詣酒泉府。一封、敦煌長印、詣魚澤候。二封、水長印、詣東部水。一封、楊建私印、詣冥安。板檄四、大守章。一檄詣宜禾都尉、一檄詣益廣候、一檄詣廣校候、一檄詣屋蘭候。一楊檄、敦煌長印、詣都史張卿。一楊檄、郭尊印、詣廣至。

〈二〉楊檄、龍勒長印、詣都史張卿。九月丁亥、日下鋪時、臨泉禁付石靡卒辟非。

このように檄は、書や蒲（封）書などの文書と一緒に送付されており、檄の伝達が文書と同等であることを示している。したがって檄は、皇帝璽書と上書、軍書のように特別ではないが、それに次ぐ重要性和早さをもつ文書と同じ通伝となっている。また檄の伝達は、軍書と区別されており、その本質は有事や軍事に関する文書ではないことを示している。そこで檄が、觚形で表面が露出している形状であれば、それは通伝方法を同じくする冊書文書の変形ということになる。

文書通伝では、居延漢簡にも檄と書を一緒に伝達する記録がある。<sup>(23)</sup>

31 二合檄張掖城司馬母起日詣設屏右大尉府 右三封居延丞印八月辛卯起 八月辛丑日鋪時驛北受囊佗莫尚

南書五封 一封詣右城官 卒單崇付沙頭卒周良

一封詣京尉候利

一封詣穀成東阿

32 檄二封書二封 檄二其一封居延都尉章・一封鄭彊印

書二封居延丞印

285.23

33 北書三封合檄板檄各一 其三封板檄張掖大守章詣府

九月庚午下舖七分臨木卒副受卅井卒弘鷄鳴時當曲

合檄牛駿印詣張掖大守府牛掾在所 卒昌付收降卒福界中九十五里定行八時三分□行一

〓 時二分

157.14

エチナ河流域で檄と書を一緒に伝達する場合は、燧の卒によって通伝している。これは疏勒河流域の懸泉置の通伝が、たとえば「以郵行」のような方法であるのに対して、燧の通伝では「以次行」による方法との違いとおもわれる。<sup>(23)</sup>ともかく居延漢簡の郵書記録でも、檄が特別に通伝されていないことを示すものである。

以上の郵書記録から、前漢後半期、王莽期、後漢初期の檄には、つぎのような特徴がある。

一、檄の本質は、緊急性と重要性が第一ではないが、比較的早く伝達され、その重要度と確認の程度は高い。それは皇帝璽書と上書、軍書が、おおむね駅騎で伝達される方法に対して、檄は御による伝達が多いことから一定の重要性が想定される。

二、檄は、上書や軍書と区別されており、一般の書と一緒に伝達される場合がある。したがって檄は、その一部に軍事に関する内容をふくむとしても、その本質は有事の情報伝達や軍書に限定されない。

三、檄には、上級から下級、同等の機関、下級から上級機関への伝達がある。これは漢王朝の行政機構で伝達される檄である。したがって檄の機能は、上級官府から下級組織に出される命令や説諭、警告が本質ではないことを示している。

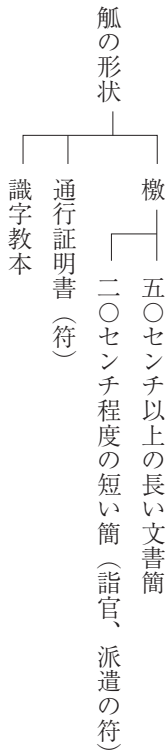
四、檄は、一般の書と同じ伝達の扱いを受けている。したがって檄と文書は、通伝の手段では区別されておらず、

共通の形式と内容があるという指摘は一定の意味をもっている。しかしその違いは、冊書と觚の形状による可能性があり、これは檄の形状と機能をふくめた説明が必要である。

郵書記録でわかる檄の特徴は、ここまでである。つぎに漢簡を対象として、檄の形状と内容、伝達方法などの機能を検討してみよう。

### 三 居延漢簡にみえる檄の特徴

漢簡の檄は、觚の形状をもつ簡牘と、「如檄書」「移檄」「檄到」「檄言」などの用語をふくむ簡牘に分けられる。角谷常子氏は、觚の形状をもつ檄について、五〇センチ以上の長い簡は通常の文書とする。また二〇センチ程度の短い簡は証明書や符の機能をもち、別に「識字教本」の要素があるとする。しかし鷹取祐司氏は、封泥匣のある短い觚を、派遣の符や、日迹の符、詣官封符の符としている。これらの内容を図示すれば、つぎの通りである。<sup>②</sup>



つまり觚の形状をもつ簡牘は、必ずしも檄ではない。觚には、文書の檄と、派遣や詣官に関する簡があり、そのほかに通行証、識字教本の要素をもつ簡牘がある。ここでは觚形で比較的長い文書の檄を対象として、その内容と機能を検討してみよう。

まず居延漢簡の12.1ABCD（長さ四二・四センチ、A33地湾、肩水候官）がある。

1 得倉丞吉兼行丞事、敢告部都尉卒人、詔書清塞下、謹候望、備蓬火、虜即入、料度可備中、毋遠追為虜所詐、書已前下、檄到、卒人遣尉丞司馬數循行嚴兵□

A

……禁止行者、便戰鬪具、驅逐田牧畜產、毋令居部界中、警備毋為虜所誑利、且課毋狀不憂者、効尉丞以下、毋忽如法律令、敢告卒人。／掾延年、書佐光、給事□

B

都尉事司馬丞登行丞事、謂肩水候官、寫移檄到、如大守府檄書律令。／卒史安世、屬樂世、書佐延年

C

□行曹謂□□長充宗、官寫移檄到、警備□□門、毋為虜所乘□、毋忽如律令。

D

大庭脩氏は、A、Bの部分について張掖太守府が肩水都尉などの部都尉に出した檄書とする<sup>(25)</sup>。その内容は、以前に出された詔書で、塞下を清くし、候望を謹しみ、蓬火を備えるなど、虜の侵入に対応することを命じている。この檄が到達したら、尉、丞、司馬をしばしば巡回させて、警備や対策を怠らないようにし、職務を果たさない者は、尉、丞以下を弾劾するという。これは警戒態勢を命じる文と理解している。Cの部分は、この「大守府檄書」を肩水都尉から肩水候官に伝えたものである。Dは、これを受けた肩水候官が、さらに下部に伝達した控えである。

ここで注意されるのは、一に、太守府から都尉府、候官、下部の組織に檄を伝達する方法が、文書伝達とまったく共通することである。それは居延漢簡の「元康五年詔書冊」や、懸泉漢簡「失亡伝信冊」「康居王使者冊」の伝達と同じように、太守府の書記である掾・書佐や、都尉府の卒史、属、書佐の名を付記している<sup>(26)</sup>。これは太守府→都尉府→候官に冊書で送付する文書と、觚で送付する檄の伝達が、同じ方法であることを示している。

二に、觚で送付された檄の伝達は、ふたたび觚の檄に書写して送付していることである。たとえばA、Bの部分は、太守府から部都尉に下した命令であり、Cは、この檄書を都尉府から肩水候官に伝えたものである。そこでもし

肩水都尉が、太守府から送られてきた檄の原本にCの部分を追加して下部に送付し、原本の控えを取っていたとすれば、A、Bの部分と、Cの部分は、担当する書記の違いによって、その筆跡が異なるはずである。しかし写真では、A、B、Cの部分は、同じ筆跡となっている。これについて富谷至氏は、A、B、Cの部分は肩水候官が受け取ったオリジナルな檄で、Dは下達文書の追記（控え）とみなしている。<sup>(27)</sup>したがって檄の伝達は、それを転送する場合にも、觚の形状をもつ檄に書写したことになる。これが文書伝達と檄の相違である。もし封印された冊書の文書を、今日の封書とすれば、文面を見ることが出来る檄はあたかもハガキにあたるであろう。しかし檄は、觚の形状で文面が見えることで、どのような利点があるのだろうか。

封書が伝達される時には、文書の封印を開いて控えを取り、ふたたび封印して転送することになる。それを目にするのは担当の官吏だけであり、さらに広く伝達するには別の方法が必要である。これに対して檄の伝達が、もし受け取った組織で原本に付記して転送し、手元に別の控えを取るのであれば、冊書の作成と封泥の付け替えが省略できる。しかし居延漢簡の12.1ABCDでみたように、檄の伝達で原本と下部の転送記録を手元に残し、別に觚の形状で証印を付けて転送するのであれば、文書処理に対して省略する作業はほとんど無いことになる。したがって冊書の文書に対する檄の違いは、緊急性と重要性や、各部署で通伝し文書処理する際に、一本の觚に文章を追加する形式ではなく、文面を開放して内容が見えることにある。これが大きな特徴である。

三に、檄では文書の内容に従う対象が複数の人びとになっている点である。たとえば「元康五年詔書冊」では、張掖郡の太守府から肩水都尉、肩水候官に通達しているが、すべて長吏に宛てて送っている。肩水候官では、これを下部の尉と候長に発信した控えを記録しているが、これも担当官だけである。しかし12.1ABCDの檄は、張掖太守府が肩水都尉に送付する際に、「檄到らば」尉、丞、司馬を巡回させて、吏卒に警備や対策を怠らないように知らせるこ

とを指示している。また肩水都尉から肩水候官に送付するときにも「写移の檄到らば、大守府檄書律令の如くせよ」とあり、肩水候官から下部への伝達でも「官写移の檄到らば……律令の如くせよ」とあって、吏卒に周知させる内容を継続している。<sup>(28)</sup>このように檄の内容は、長吏に対する命令だけではなく、吏卒に周知させる指示をふくんでいる。地方官府と部署では、受信した檄の内容に公開性をもち、布告の要素をふくむ点が、密封された文書伝達との違いを示している。

つぎに居延漢簡の278.7AB (A 10、長六四・八センチ) は、候官を中心とする上下のやり取りを示している。第二面の上端には、殄北候官の広田燧から望遠燧まで順次に伝達する「廣田以次傳行至望遠止」の文字と、封泥匣の下に文章がある。

## 2 廣田以次傳行至望遠止 回

(第二面上端)

十二月辛未、甲渠候長安候史個人敢言之、蚤食時臨木隧卒……舉蓬燧一積薪、虜即西北去、母所失亡、敢言之。  
／十二月辛未、將兵護民田官居延都尉謂城倉長禹兼行〔丞事〕

(第二面)

寫移、疑虜有大衆不去欲并入為寇、檄到、循行部界中、嚴教吏卒驚烽火、明天田謹迹候望、禁止往來行者、定蓬火輩送、便兵戰鬪具、母為虜所萃槩。已先聞知、失亡重事、母忽如律令。／十二月壬申、殄北甲〔渠〕

(第二面) A

候長縷未央、候史包・燧長畸等、疑虜有大衆欲并入為寇、檄到、縷等各循行部界中、嚴教吏卒定蓬火輩送、便兵戰鬪具、母為虜所萃槩。已先聞知、失亡重事、母忽如律令。

(第三面) B

この檄は、大庭脩、鷹取祐司、富谷至氏の考察があり、その内容はつぎの通りである。<sup>(29)</sup>第一面の文書は、十二月辛未に甲渠候長などが上申した文書である。それは甲渠候官に属する臨木隧卒が虜を発見し、烽火を挙げ、虜は西北に



去ったという報告である。これを受けて居延都尉は、同じ日に檄を転送し、部の界中を循環して吏卒に備えさせることを命じている。その翌日に、殄北候官は候長、候史、燧長等にこの檄を順次に伝達して、吏卒に警戒に当たらせている。ここには緊急性がうかがえ、大庭脩氏は、この *28.7* が殄北候官から送られた檄とみなしている。

ここで注意されるのは、最初の部分は甲渠候長などが上申した文書であり、その次は、居延都尉から殄北候官、その下部に伝達した下行文書を組み合わせていることである。このように下部からの文書を再録し、あらためて上部から下部に文書を伝達する方法は、里耶秦簡⑨1-12の文書とよく似ている。<sup>⑨</sup> ⑨1-12の文書は、洞庭郡に所属する陽陵県から上申した文書を再録し、これを洞庭仮尉が遷陵県に下した命令が、木牘一枚の表裏に記されている。この伝達方法は、居延漢簡の檄 *28.7* とまったく同じである。ただし里耶秦簡では、洞庭仮尉が遷陵県の丞に宛てて返答を要求しているのに対して、檄 *28.7* では下部の施設に伝達しながら、その内容を吏卒に周知させる点が違っている。このように檄の伝達が、文書の伝達と相違する点は、宛先となる長吏以外にも内容が見られるという公開性と、それを公布して周知させる点にある。この特徴に注目すれば、檄が觚の形状をもつのは、それを広く公布すべきという表示にあたるのではないだろうか。

それでは觚の形状をもつ檄と、「如檄書」「移檄」「檄到」などの用語をふくむ簡牘との違いは、どのようなものだろうか。これは換言すれば、檄で伝達される形態と、その内容を控える抄本との関係とみなされる。その例には、甲渠候官の F 22 で出土した居延新簡 EFP22:151ABCD (長五五・五センチ) と、22:125-132、22:133-137、22:138-150 の簡がある。<sup>(41)</sup> ここでは富谷至氏の解釈を参考として、その特徴を確認しておこう。

3 甲渠郭候以郵行 回 府告居延甲渠郭候卅井關守丞匡十一月壬辰檄言居延都田嗇夫丁宮祿福男子王歆等入關

〓 檄甲午日入到府匡乙未復檄言

男子郭長入關檄丁酉食時到府皆後宮等到留遲記到各推辟界中定吏主當坐者名會月晦有  
教  
建武四年十一月戊戌起府

EPF22:151A' B' C

十一月辛丑甲渠守候 告尉謂不侵候長憲等寫移檄到各推辟界中相付受日時具狀會月廿六日

＝如府記律令

EPF22:151D

この檄は、封泥匣の上部で、郵を通じて甲渠候官に送ることを指示している。これは居延都尉府から直接に傳達されてお、1が張掖太守府―肩水都尉―肩水候官―下部に傳達する手順や、2が甲渠候長からの上申文書、居延都尉―殄北候官―下部に傳達する文書を組み合わせる手順とは異なっている。しかしいずれも、候官から下部の施設に傳達した控えが、候官で出土する点は同じである。その内容は、建武四年（二八）十一月戊戌（二十一日）に、都尉府が以前の状況を述べて、甲渠候官に調査を命じたものである。それは十一月壬辰（十五日）に卅井関守丞の檄で「居延都田齋夫の丁宮、祿福の男子王歆たちが入関した」と知らせたが、その檄が府に到達したのは、二日後の甲午（十七日）であったという。また別に卅井関守丞は乙未（十八日）に檄を送り、「男子郭長が入関した」と知らせたが、その檄が府に到達したのは、二日後の丁酉（二十日）食時であった。それは皆、丁宮たちの到着よりも遅れている。そこで「記」が届いたら、各々の界中を調査して、罪にあたる者を月の晦（丙午、二十九日）までに報告せよと告げている（A、B、C）。富谷至氏は、これが檄の原本で、以下は控えの付記とみなしている。

甲渠候官では、これを下部の部署に傳達しているが、その控えを檄の後半に付記している（D）。その文面は、十一月辛丑（二十四日）に尉に告げ、不侵部などの候長に傳達し、この檄が府に到達したら、各々の界中で受け渡しの日時と状況を調査し、二十六日までに返答せよと命じている。ここでは下部の傳達も、觚の形状であったと推測さ

れる。これで二十九日までの返答が可能となる。この場合も、一定の緊急性がうかがえるが、檄を伝達する対象は長吏や担当者だけではなく、広く吏卒に知らせて調査する内容であることが注目される。

これに対する調査の報告は、甲渠候官で冊書文書の控えが残されている。4は、甲渠候官から都尉府に返信した控えである。

#### 4 甲渠言卅井關守丞匡檄言都田耆夫丁宮□

等入關檄留遲謹推辟如牒

建武四年十一月戊寅朔乙巳甲渠鄣守候博叩頭死罪

掾□□

敢言之府記曰卅井關守丞匡檄言居延都田耆夫丁

宮祿福男子王歆郭良等入關檄留遲後宮等到

記到各推辟界中定吏主當坐者名會月晦・謹推辟

界中驗問候長上官武隊長董習等辭相付受□

及不過界中如牒謹已効△領職教勅吏毋狀叩頭死罪

死罪敢言之

EPF22:125は、「卅井關守丞匡檄一封詣府」の調査案件に対して、以下の牒を添付することを述べる。22:126～

22:133は、都尉府に送付した文書の控えである。ここでは先に送られてきた檄を「府記」といい、調査した結果を概括している。このとき3の檄では、都尉府からの調査命令に対して、甲渠候官は不侵候長などに檄を転送して報告を命じていた。甲渠候官の管轄範囲には、北から不侵部、吞遠部、誠北部、臨木部がある<sup>(33)</sup>。しかし4では、臨木候長の

上官武と隧長たちの責任を報告している。第一簡22:126の書式は、背面に処理をした書記を記しており、これは裏返したとき、文書の左下段に位置することになる。この形式は、冊書の文書処理にみえるものであり、檄に記入する場合や、転送する文書では、同じ表面に「／某」と表記している。<sup>34)</sup> これまでの考察からすれば、檄の返答は檄によって行われるはずであろう。しかしこの案件は、すでに完了した事件に対して、なぜ檄が遅配したかを返答させるものである。また宛先と知らせる官吏は不特定の多数ではなく、都尉府に宛てた文書であり、そこには牒を添付している。したがって4の文書が檄であったとしても、添付された牒は別の文書となる。このような特徴から、甲渠候官では檄に対する報告を冊書の文書によって返答した可能性があり、4は送付した文書の控えである。

5と6は、4報告の牒にあたる二つの文書（添付ファイル、附件）である。その内容は、共に「卅井関守丞匡檄一封詣府」の題目であるが、5は十一月壬辰に出された檄の遅配に対する回答、6は乙未に出された檄の遅配に対する回答となっている。

5 卅井関守丞匡檄一封詣府 十一月壬辰言居延都田齋夫丁宮祿福男子

EPF22:133

王歆等入關檄甲午日入到府留遲

EPF22:134

・謹推辟驗問臨木候長上官武隧長

EPF22:135

陳陽等辭不受卅井関守丞匡言宮

EPF22:136

男子王歆等入關檄不過界中

EPF22:137

6 卅井関守丞匡檄一封詣府 十一月乙未言男子郭長入關檄丁酉食

EPF22:138

時到府留遲

EPF22:139

・謹推辟驗問臨木候長上官武隊長張勛

EPF22:140

等辭今月十八日乙未食坐五分木中

EPF22:141

隧長張勛受卅井誠勢北隧長房岑舖時勛

EPF22:142

付城北助隧長王明下舖八分明付吞遠助

EPF22:143

隧長董習習留不以時行其昏時習以

EPF22:144

檄寄長長持檄道宿不以時行

EPF22:145

檄月廿日食時到府

EPF22:146

吞遠隧去居延百卅里檄當行十三時

EPF22:147

定行廿九時二分除界中十三時

EPF22:148

案習典主行檄書不

EPF22:149

時二分不中程謹已効

EPF22:150

5では、臨木候長の上官武と、隧長の陳陽などを取り調べた結果として、十一月壬辰に出された檄は界中を通過していないと述べている。また6では、同じ臨木候長たち取り調べて、檄を城北助隧長から受け、吞遠助隧長に渡したが、その後を受け取った長が時間に遅れたことを報告している。この案件では、なぜ卅井関を通過した人物について、別に檄で知らせる必要があったかは不明である。しかしこれら一連の檄と文書では、檄による伝達は、広く知らせて調査する内容をもっており、返信の文書は冊書に控えが保管され、送付した文書は特定の都尉府に宛てたことがわかる。このように檄は、府記とも記され、また送付や保管する状況に応じて、冊書の形式をもつことがわかる。したがって觚の形状をもつ木簡は、檄の原本か、あるいはそれを檄で転送した控えであり、「移檄」「檄到」などの用語をふくむ簡は、檄の副本か控えであることを示している。

また注意されるのは、檄を伝達する速度である。6の文面では、吞遠隧から居延までの距離は百三十里で、檄の当行（規定の所要時間）は十三時とある。とすれば檄の伝達は「一時十里」となり、これは居延漢簡にみえる文書伝達と同じ規定時間である。藤田高夫氏は、一昼夜は「十六時」からなり、文書の伝達速度は「一時十里」と推定している<sup>(35)</sup>。したがってエチナ河流域の文書通伝では、文書と檄の伝達速度は同じく規定されており、檄の伝達は特に緊急ではないことを示している。

もう一つ例をみておこう。角谷常子氏は、檄に冊書や記と共通した内容があり、内容による区別がない例として、二種類（EPF22:153、EPF22:158～22:160）の木簡をあげている<sup>(36)</sup>。これは都尉府から伝達された文書を、甲渠候官が下達して、社稷の祭りのときに、令・丞をはじめ候長以下の人びとに循行させるという内容である。

7 建武五年八月甲辰朔戊申張掖居延城司馬武以近秩次行都尉文書事以居延倉長印封丞邯告勸農掾

褒史尚謂官縣以令秋祠社稷今擇吉日如牒書到令丞循行謹修治社稷令鮮明令丞以下當 EPF22:153A

掾陽兼守屬習書佐博 EPF22:153B

8 八月庚戌甲渠候長 以私印行候文書事告尉謂第四候長憲等寫移 EPF22:158

檄到憲等循行修治社稷令鮮明當侍祠者齋戒以謹敬鮮絜約省為 EPF22:159

故如府書律令 EPF22:160

7 都尉府の文書は、勸農掾に告げて、官県に知らせており、長吏である令・丞への命令である。これに対して、8 甲渠候官から下部に檄を発信した控えの文書で、尉に告げ、第四候長など複数の人びとに広く知らせる内容となっている。このとき候長などの人びとに広く周知させる場合には、檄の形態で伝達している。これは文書で通達された内容を、檄によって公布するように、簡牘の形態と用途の変化がわかる例となる。

以上にみてきた漢簡の檄では、いくつかの特徴が指摘できる。

一、檄の伝達には、①複数の部署を通過して通伝する方法、②下部の檄を転写しながら、命令を通伝する方法、③都尉府から甲渠候官のように、直接に伝達する方法などがある。しかし三例とも、候官から下部に伝達する控えが、候官の遺跡から出土している。また①②③のような伝達方法は、文書の場合にみられる手順と同じであり、通伝の手順で両者は区別されていない。その内容は、警備を怠らないように警告するものや、檄の遅配に関する調査がある。したがって檄は、政府からの命令や説諭、警告が本質ではないことを示している。また有事や軍事的な内容にも限定されない。

二、檄は、行政機構で伝達される時に一定の緊急性をもっている。しかし居延漢簡にみえる檄の伝達速度は、文書の伝達速度と同じ規定時間であった。したがって檄の本質は、文書伝達と比べて、とくに緊急性・重要性をもっているわけではない。これらは郵書記録からみた特徴と共通している。

三、漢簡の檄にみえる共通の特徴は、とくに伝達する内容が公開性をもち、それを広く吏卒に周知させるという要素がある。この点が、特定の官吏に宛てた文書伝達と比べて大きく相違している。これは史書でみた檄の伝達と共通している。このような特徴は、觚の形状をもつ檄の本質が、その内容を吏卒や吏民に早く閲覧し、広く公布すべきという表示にあることを示唆している。この場合は、同時に口頭伝達を併用する場合も推測される。

それでは密封された文書の伝達と、檄の伝達で広く周知させる場合は、どのように相違するのだろうか。これには『漢書』巻八九循吏伝に、宣帝のとき潁川太守になった黄霸のエピソードが参考となる。

時上垂意於治、數下恩澤詔書、吏不奉宣。太守霸為選擇良吏、分部宣布詔令、令民咸知上意。

ここで潁川太守の黄霸は、恩沢詔書が下されても官吏が奉宣しないので、良吏を選んで詔令を宣布させ、民に皇帝



の意志を伝えたことが功績となっている。しかし皇帝の恩沢詔書は、吏民に関係する文書であり、広く知らせる場合には「扁書」によって揭示させる場合がある。<sup>(37)</sup> また恩沢詔書より以外にも、文書を「扁書」によって知らせる文面は、居延漢簡や懸泉漢簡にみえている。その一例は、つぎのような形式である。<sup>(38)</sup>

五月壬辰、敦煌太守彊、長史章、丞敞下使都護西域騎都尉、將田車師戊己校尉、都都尉、小府官縣、承書從事下當用者。書到白大扁書鄉亭市里高顯處、令亡人命者盡知之、上赦者人數太守府別之、如詔書。HT0115②:16

檄を扁書する例では、敦煌漢簡1376（酥油土81.D38:22）がある。<sup>(39)</sup>

寫移檄到具寫檄扁□□亭隧高顯處令吏卒明

この欠字の部分について、『敦煌漢簡』の釈文は「傳輸」としているが、懸泉漢簡などの例によって補足すれば「扁書郷・亭・隧」にあたるであろう。これによって檄の場合にも、さらに内容を扁書して周知させる可能性がある。しかしこれまでみてきたように、一般的に檄の伝達は、觚の形状によって内容を公開し、それを受信した側では広く吏卒や吏民に周知させるという共通した特徴をもつと考えている。

## おわりに

漢代の文書行政では、文書とは違った形態をもつ檄が注目されていた。しかし檄には諸説があり、まだ不明な点が残されている。そこで本稿では、檄の伝達方法と、冊書とは異なる機能に注目して、史書と漢簡にみえる檄の事例を検討した。その結果、檄の内容や、伝達方法とその機能には、つぎのような特徴がある。表1は、史書と郵書記録をあわせて、考察の結果を総合したものである。

表1 檄（文書）の機能

機 能	史 書	郵書記録	漢 簡	総 合
緊急、重要性	○	×	△	△
有事、軍事	△	×	△	△
命令、説諭	△	×	△	△
公開性、周知	○	不明	○	○

△一部に該当

一、檄の伝達は、使者などによって国内や相手国・敵方に広く吏民に周知させる場合と、自国の行政機構のなかで伝達する場合がある。また檄には、文書によってメッセージを伝達するものと、人びとを徴召する場合がある。徴召をのぞく文書の檄は、緊迫した情勢が伝達の背景にあり、一定の緊急性と重要性がうかがえる。しかし文書通伝の郵書記録では、皇帝璽書と上書、軍書をおおむね駅騎で伝達する方法に対して、檄は文書と一緒に御による伝達が多く、もっとも緊急な伝達ではない。また居延新簡の EPT23.138～150簡では、伝達の速度を「一時十里」としており、これは文書伝達と同じ規定時間であった。したがって檄の本質は、その緊急性と重要性ではないことがわかる。

二、檄の伝達は、必ずしも軍事に限定されない。たとえば史書で、地方政権が敵方に檄を伝達して投降をうながすことや、他の諸侯王国への伝達、徴兵をする場合、盗賊が糧食を要求することには、軍事的な背景がある。しかし司馬相如が使者となった例では、皇帝の意志を巴蜀太守に下す檄は、軍事的な内容ではない。また郵書記録では、檄は上書や軍書と区別されており、一般の書と一緒に伝達される場合がある。したがって檄は、その一部に軍事に関する内容をふくむとしても、その本質は、有事の情報伝達や軍書に限定されることがわかる。

三、漢王朝の行政機構で伝達される檄には、上級から下級、同等の機関、下級から上級機関への伝達がある。觚の形状をもつ漢簡の檄では、①複数の部署を通

過して通伝する方法、②下部の檄を転写しながら、命令を通伝する方法、③都尉府から直接に伝達する方法をみってきた。このような檄の通伝は、文書伝達にみえる手順と同じである。その書式は、書を檄と言い換えている場合もあり、すでに書や記との共通点が指摘されている。また檄の内容には、警備を怠らないように警告するものや、檄の遅配に関する調査がある。したがって檄の機能は、上行文書と下行文書に共通しており、上級官府から下級組織に出される命令や説諭、警示が本質ではないことを示している。また政府が官吏を掌握し、威圧の効果をもつ要素に特定されない。

四、檄の伝達は、背景となる情勢は違っているが、ここでは情報を周知させるという共通の要素が注目される。あ  
る場合には、檄の閲覧や公布にともなって口頭で伝えている。漢簡の檄では、伝達する内容が公開性をもち、それを  
広く吏卒に周知させている。この点が、特定の官吏に宛てて密封した文書伝達と比べて大きく相違しており、いわば  
文書と口頭伝達の併用も想定できる。したがって檄に共通する本質は、情報の公開性をもち、閲覧と公布によって広  
く周知させる意義にあると推測される。

五、檄は觚の形状をもつといわれるが、觚は必ずしも檄ではない。觚には、これまでみた文書の檄と、派遣や詣官  
に関する簡があり、そのほかに通行証、識字教本の要素をもつ簡牘がある。しかし文書の檄の特徴は、冊書の封書と  
区別して見分けられ、それは長大な簡に書かれ、目にふれる状態であることが予想される。このような特徴は、檄の  
本質が、その内容を吏卒や吏民に閲覧させ、広く公布すべきという表示にあることを示唆している。そのとき檄に付  
けられる印は、すでに指摘されるように証拠印であり、内容を隠すための封印ではない。そして觚の形状ではない札  
に「移檄」「檄到」などの用語をふくむ場合は、それが檄の副本か文書処理の控えであることを示している。また檄  
が書写材料か文書かという点については、後漢時代の著述を記した史料がある。ここでは著述のなかに、書などと並

んで檄をあげており、文章表現の一種であることを示している。

このように檄の伝達方法と機能を検討してみると、その特色は、特定の官吏に発信される文書に対して、①封泥を開かなくても文面がみえる情報の公開性と、②宛先となる官吏以外に吏民への閲覧と公布が想定されている点に見える。これは宛先を特定した冊書の文書伝達に対して、あたかも今日の電子メールで全員に配布される情報のように、広く閲覧を想定した方法といえることができる。また密封された文書伝達に対して、このような文書の檄は、文書と口頭伝達を併用する方法としても注目される。したがって西北の漢簡は、その機能に着目すれば、辺境の軍事系統だけではなく、漢代の行政機構に共通する規格 (format) を知る手がかりとなる。このように秦漢時代では、文書伝達や情報処理のシステムが整っており、すでに情報社会の原形ができていた。しかし興味深いのは、こうした情報技術が規定されていながら、文書や檄の遅配などが生じていることである。これは情報システムの整備と、その運営は別の問題であることを示している。今後は、秦代の里耶秦簡から居延漢簡・懸泉漢簡をあわせて考察することによって、さらに地方官府の情報伝達と運営が理解できると考えている。<sup>⑩</sup>

## 注

- (1) 永田英正「文書行政」(佐竹靖彦など編『殷周秦漢時代史の基本問題』汲古書院、二〇〇一年、佐竹靖彦主編『殷周秦漢史学的基本問題』中華書局、二〇〇八年)、榎山明「中国の文書行政」(平川南・沖森卓也・榮原永遠男・山中章編『文字と古代日本』二、吉川弘文館、二〇〇五年)。

- (2) 永田英正『居延漢簡の研究』第一部第三章「簿籍簡牘の諸様式の分析」(同朋舎出版、一九八九年)、同「簡牘の古文書学」(『近江

歴史・考古論集』滋賀大学教育学部歴史学研究室、一九九六年）、拙稿「漢代地方の文書通伝と郵書記録」（『愛媛大学法文学部論集』人文学科編三一、二〇一一年）。

- (3) 拙稿「居延漢簡の調査と考察ノートー文書処理と『発』」（『資料学の方法を探る』九、二〇一〇年）、同「漢代簡牘的文書処理と『発』」（香港中文大学「漢帝國的制度與社会秩序」國際學術會議提出論文、二〇一〇年）。

- (4) 大庭脩『漢簡研究』第二編第六章「文書簡の署名と副署名論」（同朋舎出版、一九九二年）、角谷常子「秦漢時代の簡牘研究」（『東洋史研究』五五—一、一九九六年）。

- (5) 李均明「秦漢文書制度考察—簡牘文書的起草、審批与收發」（権仁潮、金慶浩、李承律編『東亞資料学的可能性探索』廣西師範大学出版社、二〇一〇年）、邢義田「試論秦漢公文書的正本・副本・草稿和簽署問題」（漢帝國的制度與社会秩序國際學術會議提出論文、二〇一〇年）、同「漢代簡牘文書における正本・副本・草稿と署名の問題」（稗山明・佐藤信編『文献と遺物の境界—中国出土簡牘史料の生態的研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇一一年）。

- (6) 胡平生「『扁書』『大扁書』考」（中国文物研究所、甘肅省文物考古研究所編『敦煌懸泉月令詔條』（中華書局、二〇〇一年）、馬怡「扁書試探」（武漢大学簡帛研究中心主辨「簡帛」第一輯、上海古籍出版社、二〇〇六年）。

- (7) 大庭脩『漢簡研究』第一編第五章「檄書の復原」、第二編第五章「檢」の再検討」（同朋舎出版、一九九二年）。

- (8) 李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』（文物出版社、二〇〇九年）一〇三頁に「是一種行事急切、具有較強的勸説、訓戒与警示作用的誇張的文書形式」とある。

- (9) 沈剛『居延漢簡語詞滙釈』（科学出版社、二〇〇八年）は、傅振倫、魯惟一、薛英群・何双全・李永良、薛英群、高恒、李均明の著書や論文と、『中国簡牘集成』（敦煌文艺出版社、二〇〇一年）の解釈を収録している。

- (10) 邁克爾・魯惟一「漢代行政記録」（廣西師範大学出版社、二〇〇七年）三三頁に「它基本上是单独一枚形状特別的簡牘、用於滿足快速聯絡或向衆多受信人通報信息的需要」とある。

- (11) 鷹取祐司「漢簡所見文書考—書・檄・記・符」（富谷至編『辺境出土木簡の研究』朋友書店、二〇〇三年）。
- (12) 角谷常子「簡牘の形状における意味」（前掲『辺境出土木簡の研究』二〇〇三年）。

(13) 富谷至『文書行政の漢帝國―木簡・竹簡の時代』第三章「檄書攷」（名古屋大学出版会、二〇一〇年）。

(14) 『後漢書』耿弇列伝第九に「今定河北、據天府之地。以義征伐、發號響應、天下可傳檄而定」とあるほか、その例は多い。

(15) 大庭脩「檄書の復原」に、文言の特徴に関する指摘がある。

(16) 大庭前掲「『檢』の再検討」。また注には「漢官儀曰、羣臣上書、公卿校尉諸將不言姓。凡制書皆璽封、尚書令重封。唯敕贖令司徒印、露布州郡也」とある。

(17) 鷹取祐司「漢簡所見文書考」、角谷常子「簡牘の形状における意味」など。

(18) 甘肅省文物考古研究所「敦煌懸泉漢簡内容概述」「敦煌懸泉漢簡釈文選」（『文物』二〇〇〇年五期）、胡平生・張德芳編撰『敦煌懸泉漢簡釈粹』（上海古籍出版社、二〇〇一年）、郝樹聲・張德芳「懸泉漢簡研究」（甘肅文化出版社、二〇〇九年）、張経久・張俊民「敦煌漢代懸泉置遺址出土的『騎置』簡」（『敦煌學輯刊』二〇〇八年二期）、畑野吉則「敦煌懸泉漢簡の郵書記録簡」（『資料学の方法を採る』一〇、二〇一一年）、拙稿「漢代地方の文書通伝と郵書記録」など。なお上の資料は、『釈粹』では「皇帝璽書」とし、『懸泉漢簡研究』では「皇帝璽書」に作る。

(19) 森鹿三「居延漢簡に見える馬について」（『東洋学研究・居延漢簡編』同朋舎、一九七五年）、同「論居延簡所見馬」（『簡牘研究叢』第一輯、中国社会科学出版社、一九八三年）では、騎乗する駅騎と、車を引く伝馬・私馬の併用を指摘している。また「交通路線上も適宜に設けられた場所（ステーション）を伝と呼んだ。つぎたてのために一旦休止するので置ともいい、集落の辺境にあって伝送の文書を受渡する設備があつたので郵ともいい、車を引く馬を継立てるように用意されていたので駅ともいい、旅行者の宿泊施設（亭）があつたので亭とも呼ばれた。これらの語を組み合わせさせて置郵、伝置、郵駅、郵亭などの熟語ができた」という（四二頁）。

(20) 張経久・張俊民「敦煌漢代懸泉置遺址出土的『騎置』簡」。

(21) 畑野吉則「敦煌懸泉漢簡の郵書記録簡」。

(22) 居延漢簡は、勞幹編『居延漢簡』図版之部（一九五七、中央研究院歷史語言研究所、一九七七年再版）、中国社会科学院考古研究所「居延漢簡甲乙編」（中華書局、一九八一年）の図版と、謝桂華・李均明・朱国焄『居延漢簡釈文合校』（文物出版社、一九八七

年)の釈文による。また中央研究院歴史語言研究所「漢代簡牘數位典藏」のデータを参照。

(23) 鷹取祐司「秦漢時代の文書伝送方式―以郵行・以県次伝・以亭行」(『立命館文学』六一九、二〇一〇年)。

(24) 鷹取祐司「漢簡所見文書考」、角谷常子「簡牘の形状における意味」。このほかにも觚の形状で、檄とは違う内容があり、さらに分類が必要である。

(25) 大庭脩「檄書の復原」。李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』は、12.1ABCD<sup>\*</sup> 278.7ABを「警檄」に分類する。12.1G ABC部分は、みな候官が抄録した文とみなしている。

(26) 大庭前掲「秦漢法制史の研究」第三編第一章「漢代制詔の形態」(創文社、一九八二年)、拙稿「中国古代の文書伝達と情報処理」(藤田勝久・松原弘宣編『東アジア出土資料と情報伝達』汲古書院、二〇一一年)。

(27) 富谷至「檄書攷」。

(28) 鷹取祐司「漢簡所見文書考」では、「寫移檄到」は「複写して送付した檄が到着したら」の意味ではなく、「寫移」「檄到」の別々の二語とする。また「寫移」は「文書を送付する場合に、その送付文書と一緒に送付すべき別の帳簿などをその文書発信者自身が複写して、送付文書と共に送付したことを指す」とし、「檄到」は、檄の文書それ自体を指すと理解している。

(29) 大庭脩「檄書の復原」、鷹取祐司「漢簡所見文書考」、富谷至「檄書攷」。

(30) 拙著『中国古代国家と社会システム―長江流域出土資料の研究』第五章「里耶秦簡の文書形態と情報処理」(汲古書院、二〇〇九年)、胡平生「里耶秦簡からみる秦朝行政文書の製作と伝達」(前掲『東アジア出土資料と情報伝達』)。里耶秦簡⑨4の送付部分は、以下の通りである。

四月己酉、陽陵守丞尉敢言之。写上、謁報、〔報〕署金布發、敢言之。／僮手

卅四年八月癸巳朔甲午、陽陵守丞欣敢言之。至今未報、謁追、敢言之。／堪手

卅五年四月己未朔乙丑、洞庭假尉觸謂遷陵丞。陽陵卒署遷陵、以律令從事、報之。／嘉手

以洞庭司馬印行事。

(31) 富谷至「檄書攷」。甘肅省文物考古研究所、中国社会科学院歴史研究所等編『居延新簡―甲渠候官与第四燧』(中華書局、一九九〇

年)の図版と釈文による

(32) 陳垣『二十史朔閏表』(中華書局、一八六二年)による。

(33) 藤田高夫「漢代西北辺境の文書伝達」(前掲『古代東アジアの情報伝達』汲古書院、二〇〇八年)。

(34) 拙稿「中国古代の文書伝達と情報処理」(前掲『東アジア出土資料と情報伝達』)。

(35) 藤田高夫「漢代西北辺境の文書伝達」富谷前掲「檄書攷」の注、四一五頁も、檄の通送時間が十里一時であることから、檄書が緊急時の文書ではないとする。居延漢簡では一日のノルマが一六〇里(約六四キロ)であるが、張家山漢簡『二年律令』『行書律』では郵人のノルマが一日一夜で二〇〇里(約八〇キロ)となっている。これは年代による差異とも考えられるが、郵人の伝達(「以郵行」とエチナ河流域の燧による伝達(「以次行」との差異かもしれない。

(36) 角谷常子「簡牘の形状における意味」。

(37) 胡平生「『扁書』『大扁書』考」、馬怡「扁書試探」、拙著『中国古代国家と社会システム』第九章「張家山漢簡『津関令』と詔書の伝達」。以上の特徴に関連して、富谷至「檄書攷」は、一メートル近い長大な檄は、人目にふれる一種の告知札のような揭示とみなしている。

(38) 胡平生・張德芳編撰『敦煌懸泉漢簡釈粹』(上海古籍出版社、二〇〇一年)。

(39) 甘肅省文物考古研究所編『敦煌漢簡』上下(中華書局、一九九一年)。

(40) 拙稿「中国古代の文書伝達と情報処理」、同「中国簡牘にみえる文書伝達と交通―東アジア資料学の基礎として」(『資料学の方法を拓く』一〇、二〇一一年)でその展望を述べている。